

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-131	12-071	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
Recognized spontaneous abortion in mid-pregnancy and patterns of pregnancy alcohol use. 妊娠中期における自然中絶と妊娠中の飲酒パターン		
執筆者		
Chiodo LM, Bailey BA, Sokol RJ, Janisse J, Delaney-Black V, Hannigan JH.		
掲載誌		
Alcohol. 2012 May;46(3):261-7		
キーワード		
妊娠 飲酒 自然中絶 自然流産		
要 旨		
<p>目的： 妊娠中の飲酒は自然中絶に対する潜在的なリスク因子の一つである。これまでの研究では、妊娠中の過度の飲酒は自然中絶と顕著に高い関連があると報告されている。一方で、飲酒量が低い場合は相反する結果が報告されていた。低所得者密集地帯の高リスクな母集団において胎児期におけるアルコール消費のパターンやレベルと自然中絶との間の関連を検証した。特に非常に多量の飲酒や酒浸り、高い飲酒頻度と自然中絶の増加との間の関連に注目して検証を行った。</p> <p>方法： 前向き研究の対象となる 302 名の黒人の母親に対して半構造的面接を行うことによって、自己申告に基づいた妊娠前後および継続的に妊娠中に飲酒した量とその頻度について、アルコールの種類別に分類して調査を行った。ロジスティック回帰分析を用いることで胎児期におけるアルコールの曝露に対する種々の措置と自然中絶の関係を検証した。</p> <p>結果： 様々な交絡因子について調整後、妊娠期間中の 1 日あたりのアルコール平均摂取量と自然中絶の間に有意な関係が確認できた。飲酒頻度の高さが自然中絶の予測因子でもあり、妊娠中の週 1 回の飲酒でさえ自然中絶増加と関連していた。しかしながら、交絡因子調整後において、飲酒した日の飲酒量と自然中絶との間および酒浸りと自然中絶の間には有意に関連していなかった。この低所得者密集地帯に住む黒人の母集団では、リスクレベルで飲酒していた女性が出産前ケアに伴う教育を受けた際に生じる行動変容が自然中絶に対するアルコールの影響を低く見積もらせた可能性がある。したがって、妊娠期間中の飲酒量を低く見積もった結果、自然中絶のリスクを過剰に見積もった可能性が残るのだが、こうした制約を受けない他の飲酒行為では自然中絶に対して同じような関連を示す。</p> <p>結論： 妊娠中の女性における流産に繋がる過剰な飲酒行為を特定することは、リスクレベルでの飲酒を減らして流産から守るための教育や介入プログラムの効果を向上する意味で重要である。</p>		